

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	中国における宮沢賢治童話作品の翻訳受容：一九八〇年代の復活期を中心に
Auther(s)	母, 丹
Citation	国文学攷, 243 : 21 - 34
Issue Date	2019-09-30
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049728
Right	Copyright (c) 2019 by Author
Relation	



中国における宮沢賢治童話作品の翻訳受容

— 一九八〇年代の復活期を中心に —

母 丹

はじめに

中国における宮沢賢治童話作品の翻訳受容は四つの段階に分けることができる。それぞれ一九四〇年代という発生期、一九五〇～七〇年代という沈黙期、一九八〇～一九九〇年代という復活期と、二〇〇〇年以降の最盛期である¹。四つの段階からなる受容史において、ある「異質」な訳文、一九八一年の王敏² 訳「花様翻新的飯店」³ が存在する。この訳文には、ほかの訳文に概して見られないリライトが多くなされており、言語レベルにおける翻訳というより、文化翻訳に近く、きわめて特殊な訳文となっている。この特殊な訳文は、ベルギーの翻訳理論家ルフェーヴル（André Lefevere）の提案したリライト理論⁴ で解釈することができ、本稿ではこのリライト理論を踏まえ、「花様翻新的飯店」を考察していく。また、五年後の中国側の『日本文学』⁵ 宮沢賢治特集も受容における重要な事項であり、「花様翻新的飯店」とともに考察することにより、中国における宮沢賢治受容は如何にして復活期を迎えたのかを解明していきたい。

一 リライト理論の概要

ルフェーヴルは、翻訳を「起点テキストのリライト」(vii) としており、リライトに影響を与える要素として、支援者 (patronage)・イデオロギー (ideology)・詩学 (poetics)・議論領域 (Universe of Discourse)・言語 (language) などを取り上げている。

①システム：支援者と詩学

ルフェーヴルによると、文学というシステムは二つの統制要素から影響されている。文学システムの内部には詩学（文学装置・ジャンル・モチーフ・プロトタイプ的な人物像もしくは状況・シンボルなどと、文学が社会システム全体においてどのように機能するか、もしくは機能すべきかという概念 (p.26)）が働いており、その外部において、文学を読んだり、書いたり、リライトすることを促進したり妨げたりする権力としての「支援者」が存在する。支援者となりうるのは政治家階級・政党・王室・出版社・メディア・アカデミー・検閲機関・学会誌・教育機関などであり、それらの支援者はイデオロギー・

経済・地位という三つの方面から、文学システムと関わっている（p.15 - 16）。

②翻訳：イデオロギーと詩学

翻訳（リライト）作品の在り方に決定的な影響を与える要素として、ルフェーヴルはイデオロギーと詩学を取り上げている。ルフェーヴルによると、イデオロギーは政治的領域に限定されず、我々の行動を秩序付ける形式、慣習、信条の絡み合ったものであり（p.16）、すなわち一つの社会の文化に関わるものである。その次は文学がどうあるべきかに関わる詩学である。受容する側のイデオロギーまたは詩学に合わない翻訳（リライト）は受け入れられにくいと考えられる。

③翻訳：議論領域と言語

イデオロギーと詩学との影響が具体的な翻訳（リライト）テキストにおいて、議論領域と言語の選択として現れてくる。議論領域は原文の地位・受容する側の文化において受け入れられるテキストの類型や言葉のレベル・予想される読者やその文化的脚本（cultural scripts）に関わっており（p.87）、言語は主に形態統語論的なものや韻と関わっている（p.100）。翻訳（リライト）作品をより受容されやすくするためには、議論領域と言語の手段により調整する必要がある。受容する側のイデオロギーと詩学に相応しくない部分は往々にして削除され、あるいはリライトされる。それに対して、受容する側のイデオロギーと詩学に合致する言葉が多用されることになる。

④忠実な翻訳者と活発な翻訳者

ルフェーヴルは翻訳者を忠実な翻訳者と活発な翻訳者に分けている。忠実な翻訳者は原作の文化的威信を尊重するため、イデオロギーにおいても詩学においても保守的な方法を取り、原作の文法・倫理などをそのまま保とうとする。それに対して、活発な翻訳者は原作にそれほどの敬意を持つことがなく、常に「現代版」を作り上げようとしている。自分の時代や民族の愛用する言葉を使うことにより、訳文に特別な活発さを与える。また、忠実な翻訳者は語彙・センテンスのレベルで翻訳を行い、活発な翻訳者文化全体、及び文化におけるテキストの機能のレベルで翻訳を行う、とルフェーヴルが論じている（p.49-51）。

二 王敏と「注文の多い料理店」

前述の理論を踏まえて王敏訳を考察するにあたり、予め読者としての王敏と「注文の多い料理店」との出会いを知る必要がある。中国の文化大革命時代に育ち、国家幹部の父を持ち、「工農兵大学生」、さらに「国費留学生」に選ばれた王敏は、深い愛国心と強い知識

欲の持ち主である。氏は大学時代、日本語の勉強を通じて新しい世界を開き、さらにその知識欲はとどまるところを知らなかった。それらの「新しい世界」の中で、氏に一番大きなショックを与えたのは、まさに宮沢賢治である。氏自身は対談の中で、次のように回想している。

宮沢賢治は中国の作家とだいぶ違うと感じました。その言葉自体は華美でも深遠でもないが、読む人を奥深い世界へと導くことができます。偉大でも壮観でもないが、読む人を感動させ、癒します。その平淡な言葉は千古の絶唱と同じように、真・善・美を伝えることができます。

(…)

中国のあの時代の文学作品も歌もみな熱のこもった気迫のあるもので、そうでなければ美とは言えない⁶。

文革時代に育った王敏は、当時の「熱や気迫のこもった」文学を主流とする社会風潮⁷の中で、宮沢賢治の平淡な文章から、新鮮さと魅力を感じた。「熱や気迫のこもった」文学を主流とする社会の「好み」を、後年王向遠は「中国人読者の現実批判主義的な読書習慣」⁸とより具体的にまとめている。「注文の多い料理店」がこうした紋切型に嵌らない作品であるからこそ、イデオロギーにおいても、詩学においても、当時の王敏に大きな刺激を与えたのである。

王敏はその刺激を「新風」として受け取り、作品を翻訳することにより、「中国国民のなかに新風を送りたい」⁹と考えた。「注文の多い料理店」が王敏にとって大きな刺激となったのと同様に、当時の中国のイデオロギーと詩学にとっても大きな刺激となるに違いない。特に詩学において、「熱や気迫のこもった」ものでない「注文の多い料理店」と当時中国の主流詩学とはかなり食い違っている。もちろん、一九七八年にはすでに文革が終わり、改革開放がはじまっており、イデオロギーも詩学も変わり始めるが、それは一瞬にして遂げられるものではない。変わり始める環境は「新風を送りたい」王敏にとって喜ばしいが、「新風」を確実に届け、当時の中国社会に溶け込ませるためには、特別な手段——リライト——が必要となる。

三 「花様翻新的飯店」における王敏のリライト

王敏が訳文を出したのは一九八一年のことであり、そのときの中国における日本語教育は停滞期から再開されたばかりで、まだ多くの制限がある。このような背景の下に生まれた訳文における誤訳や省略といったミスもちろん存在する¹⁰。しかし、前述したように、王敏の訳文においてはこれらのミスよりリライトのほうが注目すべきところだと考える。以下は王敏のリライトを大まかに二種類に分け、それぞれを作品におけるプロットの順番通りに考察する。

1. メリットの強調：「新しさ」と「批判性」

前節で述べた通り、「注文の多い料理店」という作品は当時の中国の主流詩学と合致しない部分があり、それは一つのデメリットである。しかし、この作品は実は、当時の中国社会において大きなメリットをも持ち合わせている。それは、外国の作品、しかも風変わりな童話作品としての「新しさ」と、都会文明や西洋文明を皮肉った「批判性」である。改革開放が始まった中国社会では、新しいものが続々と入ってきたため、「注文の多い料理店」における「新しさ」もちょうど当時の時流に乗ったと言える。また、前述の「批判性」は、「中国人読者の現実批判主義的な読書習慣」とも合致する¹¹。しかし、「注文の多い料理店」は賢治の平淡な言葉で綴られた作品であり、その「批判性」が一目瞭然ではない。王敏はこの童話作品を子供向けの作品として出版しようとした¹²ため、「新しさ」を強調して子供読者の興味を引き寄せることも、「批判性」を強調してより明瞭なものにすることも確実に必要である。さらに、受容の際「新しさ」と「批判性」というメリットをリライトによって最大限に発揮することにより、当時の中国社会において作品もより受容されやすくなると、訳者王敏が考えたようである。以下具体例を挙げる。

①原文：注文の多い料理店

訳文：花樣翻新的飯店（様式の新しい料理店）

②原文：「なかなかはやつてゐるんだ。こんな山の中で。」

訳文：“在深山荒野中，走进这样一所时髦的饭店，简直像进入了摩登时代了。”（「こんな山の中で、こんなおしゃれな（下線は筆者、以下同）料理店に入れるなんて、もうまるでモダン・タイムスだな。」）

③原文：「いや、よほど偉いひとが始終来てゐるんだ。」

訳文：“到底是伟人们…多么文明高雅！”（「いや、よほど偉いひとが…なんと文明高雅なところだ！」）

④原文：「仕方ない、とらう。たしかによつぽどえらいひとなんだ。奥に来てゐるのは」

訳文：“脱！让我们也来体验一下大人物过的生活。”（「とらう。ぼくたちもえらいひとの日常を体験しようじゃないか。」）

⑤原文：「どうも奥には、よほどえらいひとがきてゐる。こんなとこで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」

訳文：“越往里去，我越发现这个饭店的伟大和深奥之处，看来他们把我们当成上层社会的明星了。”（「奥に行けばいくほど、この料理店のえらいところと深いところがわかる。ぼくらは上流社会の名士扱いされているらしい。」）

⑥原文：二人は扉をあけて中にはいりました。

訳文：他们赶紧跑去看门背后写的是什么，希望出现一瓶真正的法国高级香水。（二人は扉の裏側にほんとうのフランスの高級香水が置いてあるのを想像しながら、急いで走りました。）

「新しさ」を際立たせるための工夫は①のように、タイトルの翻訳からはじまっている。②～⑥も、「新しさ」を見せるための工夫である。

②における「モダン・タイムス」という訳語は、チャーリー・チャップリンが監督し主演した喜劇映画の表題でもある。資本主義社会や機械文明を題材に取り、労働者の個人の尊厳が失われ、機械の一部分のようにになっている世の中を笑いで表現し、資本主義社会や機械文明を皮肉り、批判しているこの映画は、不気味なユーモアで都会文明や西洋文明を皮肉り、批判している「注文の多い料理店」と似通っているところが大きい。「モダン・タイムス」という訳語にはタイトルの「花様翻新的飯店」と同じく、新しさを際立たせる効果があると同時に、皮肉も隠されている。「モダン・タイムス」はこうした主題を持っているため、当時の中国のイデオロギーにとっても好都合である¹³。また、「モダン・タイムス」が中国で公開されたのは改革开放後の一九七八年のことであり、一九八〇年代の訳文においてこの訳語を使うと、中国人読者たちはすぐこの滑稽な映画を思い出すに違いない。さらに、「すつかりイギリスの兵隊のかたちを」した西洋かぶれの二人の紳士の使う言葉としても、「モダン・タイムス」が非常に相応しい。

③～⑥における「文明」「高雅」「えらいひとの日常を体験しよう」「上流社会の名士扱い」「フランスの高級香水」は共通しており、共に紳士たちの「上流社会への憧れ」の現われである。「文明」「高雅」は鄧小平が打ち出した「促進精神文明建設」¹⁴というスローガンにおける「生活環境を文明且つ優雅、気持ちよく且つ便利なものにする」と大きく関わると考えられ、その時代の中国人読者にとって聞きなれたスローガンとなっているのみならず、「上流社会」の雰囲気を作り出す効果も持っている。また、⑥の「フランスの高級香水」からみれば、これらの「上流社会」関連の訳語は、主に貴族社会だったフランスの文化や文学の影響¹⁵に関わっていると考えられる。

要約すれば、②～⑥の下線部の訳語は、「新しさ」を見せているのみならず、「モダン」な「上流社会」に憧れる二人の紳士の権威志向、西洋志向を際立たせる効果もあり、原作「注文の多い料理店」における都会文明・西洋文明への批判をも強めている。

作品中の「批判性」を際立たせるためのリライトは上述にとどまらない。以下に挙げるリライトは、「新しさ」とはあまり関係ないが、「批判性」を強める点においては、上述と同様である。

⑦原文：「さあ、ぼくもちやうど寒くはなつたし腹は空いてきたし戻らうとおもふ。」

訳文：「我有点冷…咱们向后转！」（さあ、ぼくもちやうど寒くはなつたし…回れ右!）

⑧原文：風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

訳文：风呼呼地吹，…两位自作聪明的绅士迷失了方向。（風がどうと吹いてきて、…二人のうぬぼれ紳士は迷ってしまいました。）

⑨原文：戸は一分も動きませんでした。

訳文：使出九牛二虎之力也推不开。他们又急又怕，面如土色，发了疯一样四处乱窜。（戸は一分も動きませんでした。二人はあまりに怖かったため、顔はまるで土色になり、慌ただしく四方八方に逃げ回りました。）

⑦における「回れ右」は軍隊の号令で、「すっかりイギリスの兵隊のかたちを」した紳士に合う行動で、滑稽さも見られる。⑧の「うぬぼれ紳士」は文字通り紳士を皮肉った言葉である。さらに⑨における紳士の狼狽ぶりに関する加筆も、明らかに二人の紳士への風刺を強める効果を持っている。⑦～⑨のリライトは、二人の紳士の滑稽さや愚かさを際立たせることにより、前述のように作品のアイロニーと「批判性」を強めると同時に、ユーモアの効果をも強めた。作品を読者に受け入れられるものにするためには、イデオロギーと詩学と合わせることは無論重要であるが、それよりもっと基本的なこととして、読者に「面白い作品だ」と感じさせることも必要不可欠である。さらに、対象読者が子供だという点から考えると、ユーモアを強める必要性はより大きくなる。

2. デメリットの変換：中国人読者の議論領域に合わせた翻訳

繰り返すが、「注文の多い料理店」という賢治の平淡な筆致で綴られた作品は本来、当時の「熱や気迫のこもった」文学を主流とする詩学と合致しなかった。しかし、王敏はその「新風」としての作品を中国の読者のもとに確実に届けるために、リライトによりその平淡な作品を中国人読者により受け入れられやすいものにしなければならない。主流詩学と合致しないというデメリットを、王敏はどのように処理したのか。

⑩原文：「けふ一日なんぎしたけれど、こんどはこないゝこともある。このうちは料理店だけれどもたゞでござ馳走するんだぜ。」

訳文：“我们东奔西跑了一天，口渴腹空疑无路，这不是，西餐美味又一家了。”（「きょう一日なんぎしたけれど、口渴き腹空きて路なきかと疑うに、ほら、美味しき西洋料理又一家じゃないか。」）

⑪原文：「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんといふのはその意味だ。」

訳文：“门上不是写着‘请不必客气’吗！就是说欢迎我们‘米西、米西’。”（「決してご遠慮はありませんと書いてあるじゃないか。それはミシ、ミシ（めし、めし）という意味だ。」）

⑫原文：「金気のものはおぶない。ことに尖つたものはおぶないと斯う云ふんだらう。」

訳文：“电碰上金属会影响色、香、味。我看，咱们的鞋扣也得取下来。”（「電気が金気のものにあうと色、香り、味に影響する。してみると、靴のボタンもとらなきゃいけない。」）

⑩における「口渴腹空疑无路，西餐美味又一家」は「山重水複疑无路，柳暗花明又一村¹⁶」という中国人読者が熟知している詩をパロディー化したものである。⑪における「米西、米西（ミシミシ）」は兵隊中国語で、戦争のとき、日本人は「めしめし」というが、

中国人が話す発音が「ミシミシ」となってしまう。中国人にとって馴染みのある「日本語」であり、読むとすぐ日本人のイメージが思い浮かぶ。また、「注文の多い料理店」は日本の文学作品であり、登場人物も日本人であるという事実にも呼応している。最後の⑫に出てくる「色、香り、味」は中国の料理における重要な判断基準であり、同様に中国の読者たちになじみを感じさせるための訳語だと言える。

平淡なものを変えるためには、「味付け」が必要である。上述した三つのリライトにおいて、訳者王敏が選択した「味付け」はいずれもユーモアに富みつつ、中国人読者の議論領域にも合致した訳語である。そうしたリライトにより、作品は「熱や気迫のこもった」ものにこそならなかったが、中国人読者に馴染みを感じさせる訳語が「主流と合致しない」という違和感を弱める効果を持っていると言えよう。さらに、ここの⑩～⑫を、前述の⑦～⑨と合わせてみれば、王敏のリライトにより、「注文の多い料理店」はよりユーモアに富んだ「花樣翻新的飯店」に変身したのがわかる。主流詩学と合致しないところが払拭しきれないが、「花樣翻新的飯店」はユーモアに富んでいるため、中国人読者（特に子供読者）にとっては「面白い作品」となり、より基本的なところにおいて読者を惹きつけていると言えよう。

四 「花樣翻新的飯店」とその支援者

王敏が作品を翻訳する際、イデオロギーと詩学において施したリライトは読者のためだけではない。作品を読者の目に触れさせるために、まず最初に出版しなければならない。作品を世に出すか否かを決めるのは、第一節で述べた、文学システムの外部から働きかけ、イデオロギー・経済・地位という三つの方面から、文学システムと関わる支援者である。支援者となりうるのは政治家階級・政党・王室・出版社・メディア・アカデミー・検閲機関・学会誌・教育機関などであり、一九八一年の「花樣翻新的飯店」の場合、直接の支援者は出版社・メディア・検閲機関となるが、それらは当時全部国营または政府機関であるため、一番大きな支援者は国家・政府だったと言えよう。こうした支援者は、経済や地位より、むしろイデオロギーの面において、「花樣翻新的飯店」に大きく関与したと考えられ、しかもそのイデオロギーも、専ら「政治的領域」に限定されていたと言えよう。すなわち、読者に受け入れられるために、「花樣翻新的飯店」は前節で述べたようなイデオロギーと詩学に関するリライトが必要であるが、それよりも先に、当時の中国において、「政治的領域」と大きく関わる支援者に認められなければならない。そこで、「花樣翻新的飯店」を取り巻く支援者の状況を、王敏の回想から確認する必要がある。

文革が終わるころ、中国の出版社は、全国でたぶん四〇社前後しか残っていなかったと思う。(…) そのうち、児童書の出版は、わずか二社のみ。二億人の子供に対して年間の出版は、二〇〇種ぐらい。

出版は、社会主義中国の重要な「障地」であるという意識から、つねに国の政策に同調するよう要求され、取り締まりの対象にされている。文革前は、出版社は数えきれないほどの「毒草」¹⁷を争って世に出したものの、文革中は、政府に指定されたもの以外の出版は完全に中止状態……。ましてや、学生だった自分には、翻訳本出版の「野心」を燃やすことなどできようはずもなかった¹⁸。

「政治的領域」の事情により、当時「花樣翻新的飯店」の置かれている支援者の状況はかなり厳しいものであった。出版社自体が数少ないのみならず、外国の作品が「毒草」扱いされがちな時期において、果たして出版が許されるかどうかも覚束ない。そこで、王敏は自分なりに後押し、一九八〇年の夏、支援者システムにおける重要人物の一人——掲祥麟¹⁹を訪ねた。

王敏の回想によると、「前向きで、開放的な考え方の持ち主」である掲祥麟が「花樣翻新的飯店」の話を知ると、大喜びした。自分が今から外国児童文学を紹介する専門誌『世界児童』²⁰を発刊するので、王敏に訳文を載せることを勧めた。

王敏の回想にはさらに、「花樣翻新的飯店」が審査を受ける場面も記されている。

「社会主義革命の建設に、直接役立たない作品は、いま出すべきではない……」

「いまずぐには役立たないかもしれないが、内容が中国の大地にさわやかな風を送ってくれるだろう……」

「しかし、日本の作品を紹介する出版自体、慎重に行うべきだ。もし、第二次文革が起これば、これを出版した責任がきつと問われる……」

「わかった。ぼくが責任をとる。訳を推薦したのは自分なのだから」

やはり、最後は、掲さんの一声で出版が確定した²¹。

この検閲の場面からみても、作品が「政治的領域」の事情に迎合するかどうか、つまり「社会主義革命の建設に」役立つかが審査において如何に重要かがわかる。出版に反対を唱える審査員は「社会主義革命の建設に直接役立たない」という理由を挙げているが、掲祥麟はこの作品が「さわやかな風」、つまり「新風」となるため、長い目で見れば役に立つと主張し、当時の中国社会に「新しいもの」を取り入れることの大切さを論じながら、出版を推し進めようとしている。また、「日本の作品を紹介する」ことに伴う危険性について、掲祥麟は自分が責任を取ると言ったので、これで漸く出版が確定した。こうした流れからみると、「花樣翻新的飯店」の支援者の中において、掲祥麟が極めて重要な存在であることは明らかである。

王敏が掲祥麟を訪ねたのは一九八〇年の夏で、「花樣翻新的飯店」が掲載されたのは一九八一年の元日ということから考えると、この時間間隔において、掲祥麟が「花樣翻新的飯店」のリライトについてアドバイスしたことも考えられなくもない。中国共産党や中国作家協会という国家レベルの組織に属し、児童文学関連雑誌の編集経験に富み、しかも自ら児童文学の創作もしている掲祥麟は、当時一人の大学院生に過ぎなかった王敏に比べ

て、遙かに当時中国のイデオロギーと詩学の状況や検閲の状況、さらにそうした社会やそうした検閲に受け入れられそうな文学の在り方を熟知しているはずである。ただし、訳者は「王敏」だけとなっているので、掲祥麟の「花樣翻新的飯店」への関与は、出版における大きな支援と、訳文におけるアドバイスにとどまっていると判断するのが妥当であろう。

王敏が訳した「花樣翻新的飯店」は、一九八一年元日、雑誌『世界児童』創刊準備号に掲載されたのち、雑誌『小星星』（一九八七年）や『少年文芸』（一九九四年）に二回再掲載され、さらに一九九六年の『宮沢賢治作品選』や、二〇〇七年の『宮沢賢治傑作選』という二冊の単行本にも収録されている。イデオロギーと詩学に相応しいリライトを練り出すのはさぞ大変だったろうと考えられるが、結果としてこの改革開放後の「宮沢賢治作品翻訳第一号」は長きにわたって読まれており、確実に成功を取めていると言えよう。

五 一九八六年の『日本文学』（中国日本文学研究会刊行）宮沢賢治特集

王敏はその後も宮沢賢治作品研究と翻訳に取り組み、一九八六年、于長敏・鄧雲凌らと『日本文学』宮沢賢治特集を組んだ。その特集において、「よだかの星」「雪渡り」「注文の多い料理店」「風の又三郎」「オツベルと象」「猫の事務所」「なめとこ山の熊」という七篇の童話、「くらかけ山の雪」「雲の信号」「かはばた」「林と思想」「高級の霧」「雨ニモマケズ」「曠原淑女」という七首の詩の翻訳のほか、于長敏と王敏による論文がそれぞれ一篇ずつ載せられている。この宮沢賢治特集にも「注文の多い料理店」の翻訳があるが、それは王敏によるものではなく、劉秀芝によって訳された、原文に忠実な訳文である。この七篇の童話の中に、王敏の翻訳もあるが、それは「雪渡り」だったのである。その「雪渡り」の訳出方法は一九八一年の「注文の多い料理店」と完全に異なり、つまり、リライトはほとんど見られず、原文に忠実に訳しているのである。こうした事情から考えると、訳文中多くのリライトを施すのは王敏の方法や習慣ではなく、改革開放初期という特殊な時期において、当時のイデオロギーと詩学とに合わせるための、特殊な訳し方だったと言えよう。

「花樣翻新的飯店」という改革開放後の「宮沢賢治作品翻訳第一号」が宮沢賢治作品受容のために、良い基礎を築き上げたことは前述の通りである。また、一九八六年には改革開放も始まってから既に八年間が経ち、イデオロギーと詩学の更新もある程度進み、外国の作品がオリジナルなままでも受け入れられる環境が次第に整ってきたと考えられる。一九八六年の『日本文学』に掲載された宮沢賢治作品の翻訳は誤訳こそあるが、全体的に見れば原文に忠実であり、大きなリライトが見られない。しかし、後の二篇の論文となると、状況は異なっている。二篇の論文は、于長敏が書いた宮沢賢治とその作品の概要を紹介する「宮沢賢治とその作品について」と、王敏が書いた日本の宮沢賢治研究現状を紹介する「宮沢賢治研究の五〇年」である。于氏の論文中には「作品中の暴露や批判は戦闘力に欠き、急所を押えきれていない」、「残酷な闘争を目の前にしながら、民衆の反抗を励まさず、

かえて我慢や自己犠牲を主張したところに、宮沢賢治の限界性が見られる²²」という興味深い指摘があり、王敏の論文も一九八〇年代までの日本における宮沢賢治研究現状を客観的に述べた後、最後のところに日本側の宮沢賢治に関する「批判」を以下のように書き記している。

最初反論を出したのは、プロレタリア児童文学理論家・榎本楠郎（正確には榎本楠郎、筆者注）である。

1936年7月、『新児童文学理論』のなかで、榎本は賢治作品に階級性、社会性が足りない^{ママ}と批判した。また、国分一太郎も賢治の農村活動の限界性について批評した。佐藤勝治はその宗教性を批評した。（…）もちろん、文学評論には、必ず批判的評論が伴うものである。これは観客的に（正確には客観的に、筆者注）作家および作品を評価する^マう^マで、究めて重要なことであるというのは疑いないであろう²³。

しかし、王敏はここで事実とは異なる言明をしている。榎本楠郎がプロレタリア児童文学理論家であり、その著書『新児童文学理論』において、賢治を批判していることも確かであるが、それは賢治作品の「階級性、社会性」とは関係なく、「児童の読んで理解しやすい」ものではないから「童話」とは言えない²⁴という立場から批判の声を挙げたものである。

于長敏と王敏の論文は一見、同じ傾向を持っている。すなわち、「現実批判主義」的な立場から、宮沢賢治作品の戦闘力と批判性の「物足りなさ」から生じる作品の「限界性」を批判している点である。しかし、于長敏の批判は彼自身の意見であるのに対して、王敏の論文における批判は氏の本音でない可能性が高い。王敏は自ら批判の声を挙げずに、作家や作品に対する批判の重要性を論じながら、日本側の批判的意見を幾つか紹介したに過ぎない。しかも、その最初の「反論」の中には「階級性、社会性」に関する「事実とは異なる言明」も混じっている。『日本文学』という雑誌は重要な出版物であるため、当時のイデオロギーと合わせる必要がある。したがって、王敏は事実と異なる言明をしてまで、賢治作品の「階級性、社会性」に対して批判的立場に立った「日本側の声」を取り上げなければならなかったのである。一九八六年という年は、ちょうど文化大革命終焉後の十年目に当たる。しかし、「階級闘争」などを唱えたその時代の影響は、まだ根強く残されている。

前述したように、一九八六年という年になると、イデオロギーと詩学の更新により、外国の作品自体がオリジナルなままでも受け入れられる環境が次第に整ってきたが、中国の研究者・評論家が作品に対して評論を出す場合は、外国作品の文学性・芸術性を評価しながらも、イデオロギー（特に政治的領域において）に同調する姿勢を示さなければならぬ。「資産階級的」「人道主義的」で、「徹底的」「革命的」でないところから、外国の作品における「限界性」を批判する論説はまさに当時の紋切型であったのである。

おわりに

「花様翻新的飯店」と『日本文学』宮沢賢治特集以降、中国における宮沢賢治の翻訳も研究も順調に展開されるようになり、宮沢賢治の知名度も次第に上がってきた。つまり、それらが社会主義中国における宮沢賢治受容の礎石となったと言えよう。本稿の考察により、中国における宮沢賢治受容の一九八〇年代の状況はある程度明らかになったと考えるが、それ以前及びそれ以降の受容状況も無論見落とすわけにはいかない。特に戦時下の一九四〇年代（発生期）において、複雑な歴史的背景に絡む受容は一層興味深いものになるに違いない。今後は受容の発生期・沈黙期・復活期・最盛期を全部解き明かすことにより、中国における宮沢賢治受容の全体像を浮き彫りにしていきたい。

【注】

宮沢賢治原作の引用はすべて『新校本宮沢賢治全集第十二巻（本文篇）』（筑摩書房、一九九五年十一月）に拠った。ただし、ルビは適宜省略した。

中国語の訳文及び資料の日本語訳はすべて筆者によるものである。ルフェーヴルのリライト理論の翻訳は神戸大学博士論文「中国における谷崎文学の翻訳に関する研究——リライト理論の視点から——」（尹永順、二〇一三年）を一部参照した上で作成したものである。

- 1 雷剛著、相澤瑠璃子訳「中国においての宮沢賢治の翻訳と普及」（王敏編『東アジアの中の日本文化』、二〇一三年九月）を参照し、中国国家図書館（<http://www.nlc.cn/>）や中国知網（雑誌・博士論文・修士論文・会議論文・図書などのデータを含む中国知識資源データベース）（<https://www.cnki.net/>）のデータによると、各時期の受容状況は以下の通りである。

①発生期・一九四〇年代：

- ・銭稻孫「北国農謡」（「雨ニモマケズ」）（北京近代科学図書館『日本詩歌選』、一九四一年四月）
- ・季春明『風大哥』（「風の又三郎」）（新京・藝文書房、一九四二年）
- ・陳録妮「定件繁多的館子」（「注文の多い料理店」）（太平出版印刷公司『女聲』一九四三年十二月）
- ・森莊已池「雨ニモマケズ」（賢治紹介文と「雨ニモマケズ」の漢訳）（満洲文芸春秋社『藝文』一九四四年八月）

②沈黙期・一九五〇～七〇年代：

文化大革命などの複雑な政治的問題に起因し、外国との文化交流が半ば途絶えていた。その間、翻訳本は一冊のみであった。

洪忻意『小木偶拉大提琴』（セロ弾きのゴーシュ）（中国少年儿童出版社、一九五七年）

③復活期・一九八〇～九〇年代：

- ・王敏「花様翻新的飯店」（『世界児童』創刊準備号、一九八一年一月一日）
- ・姜念東主編『日本文学』（吉林人民出版社）宮沢賢治特集（一九八六年第二期）
- ・王敏「花様翻新的飯店」（『小星星』一九八七年第九期）
- ・胡美華・傅克昌『銀河鉄道之夜』（西北大学社、一九九四年七月）
- ・周龍梅『宮沢賢治童話』（訳林出版社、一九九四年八月）

- ・藤瑞『宮沢賢治童話選』（光明日報出版社、一九九四年十月）
- ・王敏「花樣翻新的飯店」（『少年文芸』、一九九四年十一月）
- ・王敏『宮沢賢治作品選』（春風文芸出版社、一九九六年六月）

④最盛期・二〇〇〇年以降：

二〇〇〇年～二〇一八年まですでに六〇種を超えているので、ここでは省略させていただきます。

- 一九五四年生まれ。大連外国語学院日本語学部卒業。四川外語学院大学院（日本文化と日本文学）修了。文革後、国費留学生として宮城教育大学に留学。お茶の水女子大学で人文科学博士号を取得。現在法政大学教授。中国優秀翻訳賞、山崎賞、岩手日報賢治文学賞などを受賞。
- 初出は雑誌『世界児童』創刊準備号（一九八一年一月一日）であるが、現時点入手できていない。しかし日本側の雑誌『賢治研究』二七号（一九八一年六月）には王敏の訳が掲載されている。今回の論ではこのバージョンをもとに考察を行う。
- 本稿では André Lefevere『Translation, Rewriting and the Manipulation of Literary Fame』を中心に論を進める。本の初版は一九九二年、Routledge により出版されたが、本稿では二〇〇四年七月の上海外語教育出版社の再版から引用する。
- 中国日本文学研究会（一九七九年成立）が一九八二年に創刊した雑誌で、出版社は吉林人民出版社である。
- 雪石「与日本学者王敏の対話」（『対外伝播』二〇〇八年一月）
- 中国は近代から、帝国主義国家に蹂躪されながらも、絶えず「革命」「闘争」というラディカルな方式で抵抗し続けていた。さらに、社会主義中国成立後、「文化大革命」という「革命」「批判」「階級闘争」を唱える時代があったため、ラディカルなものを好む社会風潮がさらに強くなった。こうした背景で生まれた文学や芸術は、自然に「熱や気迫のこもった」ものになると考えられる。
- 「当代中国的日本文学阅读现象分析」（王向遠『名作鑑賞』、二〇一四年一月）において、王向遠は、中国の読者が長年身につけていた現実批判主義的な読書習慣を持っており、社会に関与し、社会を批判することこそ文学の真義だと考える傾向がある、と論じている。こうした読書習慣は、中国古来の「文以載道（文を以て道を載せる）」（『通書・文辞』宋・周敦頤）という思想や、「革命」と「闘争」に満ちた近代及び文化大革命時代から影響され形成されたものである、と筆者は考える。
- 王敏『謝謝！宮沢賢治』（河出書房新社、一九九六年九月）によるものである。
- 誤訳と省略は以下の通りである。

(1) 誤訳

①髪に対する注文

原文：「山のなかだとおもつて見くびつたんだよ。」

訳文：「可別小看我们，把我们当成山里人。」（「ぼくらを山の中の人だと思って見くびったら困るんだよ。」）

②クリームの注文

原文：硝子の壺

訳文：一道玻璃门（硝子の戸）

原文：靴下

訳文：鞋子（靴）

③二人の紳士が気付いたとき

原文：「塩をもみこまないやうだよ。」

訳文：「可不要把盐揉掉啦。」（「塩を落としたら大変だよ。」）

原文：「へい、たゞいま。ぢきもつてまゐります。」

訳文：“既来之則安之。”（「住めば都。」）

④紙屑のような顔

原文：お湯にはいつでも

訳文：怎样燙，怎样洗（どんなに熱しても、洗っても）

(2) 省略

①紙屑のような顔

原文：顔がまるでくしやくしやの紙屑のやうになり…

- 11 一方、一九八一年という年は、文革が終わって間もない頃であり、文革の影響がまだ完全に消えたわけではない。文革の時代には多くのスローガンが勢いよく唱えられており、その中に、「貧下中農越貧越光榮！（貧乏であればあるほど光榮である！）」「徹底批判資産階級反動路線！」といった、都会文明・西洋文明を批判するものもある。
- 12 注9に同じ。
- 13 中国で公開された（一九七八年）直後の一九七九年に、三篇の映画評が書かれており、三篇とも映画における資本主義への批判を強調している。
- 14 具体的に、「文明的な都市・農村を造ることにより、社会の風習を団結且つ進取、健康且つ向上という方向に導く。公共秩序を整然とし、規律を厳正にする。生活環境を文明且つ優雅、気持ちよく且つ便利なものにする。社会の文明の程度を顕著に高める」（『鄧小平理論概論』南海出版公司、二〇〇〇年二月）というのが唱えられている。
- 15 フランスと社会主義中国との外交は一九六四年から始まっており、フランスの文学作品も日本文学に劣らないくらい多く翻訳紹介されている。
- 16 陸游の漢詩「遊山西村」
莫笑農家臘酒渾 豊年留客足鷄豚
山重水複疑無路 柳暗花明又一村
簫鼓追隨春社近 衣冠簡朴古風存
從今若許閑乘月 拄杖無時夜叩門
書き下し文：
「山西の村に遊ぶ」
笑ふ莫かれ農家の臘酒の渾れるを 豊年客を留むるに鷄豚足る
山重水複路無きかと疑ふ 柳暗花明又一村
簫鼓追隨して春社近く 衣冠簡朴にして古風存す
今從り若し閑かに月に乗ずるを許さば 杖を拄いて時無く夜に門を叩かん
（前野直彬『漢詩大系 第十九卷 陸游』集英社、一九六四年十二月）
- 17 文革中、外国の文芸作品は「毒草」と呼ばれていた。一九八〇年代という文革が終わって間もない頃には、外国の文芸作品が「毒草」扱いされるという状況もあり変わらなかった。
- 18 注9に同じ。
- 19 中国共産党員、中国作家協会のメンバー。児童文学関連雑誌（『児童生活報』『赤いスカーフ』など）の編集長であり、自ら児童文学の創作もしている。
- 20 『世界児童』という雑誌は、四川外語学院が編集を引き受けている。王敏も当時、四川外語学院「日本文化と日本文学」専攻の大学院生であった。
- 21 注9に同じ。

- 22 于長敏「宮沢賢治及其作品浅析」『日本文学』（吉林人民出版社）宮沢賢治特集、一九八六年二月
- 23 一九八六年『日本文学』（吉林人民出版社）に発表したこの中国語の論文「宮沢賢治研究五〇年」を、王敏は日本語に訳し、東京成徳大学研究紀要第六号（一九九九年三月）に掲載した。内容はほぼ同様であるため、本稿では日本語のバージョンから引用する。
- 24 槇本楠郎『新児童文学理論』（東宛書房、一九三六年七月）

— ぼ・たん、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学 —